

新『教会通信』(2018年12月)

☆(聖書に今日を聞く)☆

伊豆イエス之御霊教会

牧師 三崎 紘

伊東市十足324-37

TEL 0557-45-3692

FAX 0557-45-7081

<http://izukogen.wonderful.to>

ハレルヤ!

近年、聖書に予告されている終末的現象を思わせる気象災害(地震・台風・異常高温・大雨・高潮・飢饉等)が大型化しており、聖書を識らない世人の口からも『世の終わりだ』と言わせる程に話題に上がる事も多く、直近では東京23区の面積に相当する米国カリフォルニア州北部の山林火災が連日ニュースとして取り上げられておりました。

先月末の降雨によりやっとな鎮火の方向に向かったようですが、此の地方の森林火災は例年の事でもあるものの、今年は発生件数も多く州を上げて消火に努めたようで、それでも高名な俳優や歌手などの豪華な別荘も多数焼失し、85名の死者が出ており250名の行方が不明であるとか。

此の年、2018年を振り返って見ますと、異常気象現象に依る災害ばかりでは無く、世界的規模での人心の寒冷化が極度に高まっている事が心に掛かります。

つまり人類愛が希薄になって来つつある事が、気懸かりであります。

是まで世界の警察官と言われたアメリカ合衆国の他民族に対する懐の広さが、その根底に有りましたが、此の処、大幅に変わって参りました。

近代国家の牽引者的役割を担って来た米国でしたが、此処に来て急にアメリカ第一主義へと方向転換を図ったかのように将来の展望が掴めず、是までとは真逆の、世界のお荷物的様相を呈して来ております。

今の時代、大国のリーダーに彼の人々が、選挙に選ばれて顕れて来た事を不審に思う人もおりますが、神を崇める者として、納得出来るのも聖書の預言であるマタイ傳第24章に記された◎『されど未だ終にはあらず』、◎『此等はみな産の苦難の始なり』に合致している故であります。

それに引き摺られるように、世界の各地が混沌として参りました。

八十億人に近い地球上の人々が、人類愛イコール正義であるとする思念から離れて、自分の国さえ良ければ、自分の家庭さえ良ければ、自分さえ良ければ、と成って仕舞いますと、是までの人類と地球の終末であります。

天地萬物の創造者であられる我らの神・主イエス様は、その御経綸を肅々と進めておられます。

そのような現実の社会の中に在って私たちは、自らの信仰の仕上げを丹念に且つ急ぐ必要があるのではないのでしょうか？

私たち神の子としての自覚を有つ者は、神の子に相応しい信仰者としての生活を自他ともに判る形態で築き上げねばなりません。

ひとり善がりでは無く、聖徒方同士の間で自他共に認められるその仕上げ迄の残り時間は、盗人の夜来たる如く、何の前触れも無しに突如として、と仰有る主の御再臨までの時間であります。

それは、もしかしたら今夜かも、知れないのです。

嘗て主イエス様が此の世に顕れて、あの十字架にお掛かり下さった目的は、飽くまで私たち(神に選ばれた者)を神の家族の一員として階に永遠を共有しようとお考えからであります。

私たちは、御救いの真理を直視しようとはしない世的な信仰者とは一線を画して、主の御霊に導かれる真の神の子供である事をしっかりと認識し、残されている僅かな時間を無駄にする事なく、主に倣う者となり似た者となって、いよいよ近付いて参りましょう。

主イエス様が十字架にお掛かりになられる前夜、お弟子達との最後の晩餐をなさいましたが、此の最後の晩餐会を主イエス様は楽しみに待ち望んでおられました。

◎『われ苦難(十字架の苦難)の前に、

汝らと共にこの過越の食をなす事を望みに望みたり。』

(ルカ傳第22章15節)

お弟子達とは大凡三年半の間、時に起居を共にし、神の国を語り、父なる神のみ心と御経綸などを悉に語り聞かせて、また穢れた靈に憑かれた者や重篤な病人を癒し、死人を生き返らせ、盲人の目を開かせる等の不思議な御業を示され、弟子達に神の使徒としての実践教育をなさいました。

尚、最後の晩餐の記事はヨハネ傳に於きましては、その13章から17章までに記されており、是から拝読します17章は弟子達との食事と語りが終わりに、主が天の父なる神様への禱りをお献げしたその内容であります。

ヨハネ傳第17章の聖言を繙き、解説などを記して参ります。

◎『今は我なんじに往く、而して此等のことを世に在りて語るは、

我が喜びを彼らに全からしめん為なり。』

(ヨハネ傳第17章13節)

※『もう間もなく私は貴方(天の父なる神)の御許へ参ります。その時を前にして今、父上への祈禱の言辞を此のようにして残しますのは、此の世で出遭った弟子達に、私の心の裡は十字架を前にして喜びに溢れている事を明確に知って欲しいと思うからであります。』

◎『我は御言を彼らに与えたり、而して世は彼らを憎めり。

我の世の者ならぬ如く、彼らも世の者ならぬに因りてなり。』

(ヨハネ傳第17章14節)

キリストは天の父より賜った聖言を、主を信ずる者達に授けました。

イスラエル人の殆どはユダヤ教徒でありましたから、旧き戒律を大切にする彼らには、キリストが述べる新しい教えには反発を覚えるばかりであり、その上、“私は天から来た”との言葉に神を冒瀆するものだとして、何としてでもキリストを亡き者にしようと企んでおりました。

つまり、キリストの新しい教えに信じ従う者達は皆、ユダヤ教徒に取りまして許し難い存在であります。

そこで主イエス様が天の父なる神様に向かって言われた御言が

◎『我の世の者ならぬ如く、彼らも世の者ならぬに因りてなり』と仰有っておられるお言葉に、私の心が惹かれて参ります。

キリスト(救い主)なる主イエス様が、『我の世の者ならぬ如く』と言われる事には何らの異議もありませんが、『彼らも世の者ならぬに因り』との御言葉には、自分自身の置かれている現実の境遇を顧みて“ああ、そう言う事なんだ”と妙に心の弾みが感じられるのであります。

時間空間を飛び越えて、主の御声が聞こえてくる気が致します。

確かに今は、

◎『我キリストと偕に十字架につけられたり。

最早われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり。

今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我が為に

己が身を捨て給いし神の子を信ずるに由りて生くるなり。』

(ガラテヤ書第2章20節)

との聖言の中に身を置いて活かされている事への確かな自覚は持っております我らではあります。二千年もの大昔の方向から主イエス様が直接、『汝も我と同じく世の者ならず』とのお言葉を賜ったような気がして参りますから不思議であります。正に聖書は活きた書物であります。

その聖言は、上記ヨハネ傳第17章14節に続く16節にも重ねて記されております。

◎『我の世の者ならぬ如く、彼らも世のものならず。』

此の17章には此の世の者では無い者、即ちイエス・キリストの十字架の御業に依って開かれた【水と霊の御救い】(ヨハネ3:5)に与った者達は、天の御神を中心として皆一つであり、一つとならねばならない、と強調しておられます事に留意させられます。

◎『これ皆一つとならん為なり。父よ、なんじ我に在し、

我なんじに居るごとく、彼らも我らに居らん為なり、

是なんじの我を遣わし給いしことを世の信ぜん為なり。』

(ヨハネ傳第17章21節)

解りやすく註^{ちゆうかい}解させて頂きます。

※『皆が一つとなる事^{ぜんてい}が前提であります。

父なる神がキリストである私と一緒にあるように、聖徒達も私達と何時も一緒に在る事が私たちの目的であり、父が私を此の世に遣^{つか}わした真の目的は、総ての者達はその事を信じて救いに与^{あずか}る事であり、その為には父の使命^{しめい}(十字架)に勝利致さねばなりません。』

主イエス様は、此の世に人間として誕生なさいました。

人間の躰^{からだ}には、血管があり神経が張り巡らされておりますように、主の御躰^{みからだ}にも同じく血管には血液が流れ、神経も張り巡らされております。

十字架に釘で打たれ、ぶら下げられる、そのお痛みとお苦難は如何ばかりか想像するだに察^{さつ}して余りがありますが、その十字架の刑罰^{けいばつ}を目前^{もくぜん}になさって、我ら罪人の救いの為^{よろこび}に歓喜(ヨハネ17:13)すら感じておられた事には、唯々有り難く感謝、感謝であります。

さて、上記の聖言^{みことば}は、次の聖言^{みことば}に由^よって纏^{まと}められております。

◎『即^{すなわ}ち我^おかれらに居^{いま}り、汝^いわれに在^あし、
彼ら一つとなりて全^{まつた}くせられん為^なり、
是^{これ}なんじの我^{つか}を遣^{つか}わし給^{たま}いし事^{こと}と、我^{われ}を愛^{あい}し給^{たま}う如^{ごと}く
彼らをも愛^{あい}し給^{たま}う事^{こと}とを、世^よの知^しらん為^なり。』

(ヨハネ傳第17章23節)

※『我(イエス)は、彼ら(主を信ずる者)と一緒にあり、汝(父なる神)は、我(イエス)と一緒にあり、故に神を信ずる者達は、父なる神と主イエスと完全に一つとなるのです。私が父から遣^{つか}わされて来た事を信じなかった世の者達は、父なる神が此の世に私を遣^{つか}わした事を知るでしょうし、私を愛しているのと同じく、神を信ずる者達をも愛している事を知るでしょう。』

さあ、一体これはどう言う事を指^さしておられるのでありましょう？

一つになる、と言う事の意味を考えてみます。

聖書の記事を思い起こしながら種々^{しゆじゆ}考え、また^{いの}祈りの中に思^{おそ}わされます事は、畏れ多くも、私たちは神の一族^{つら}に連なる、と言う誠^{ひやく}に飛躍した結論に至るのであります。

聖書を識り、牧師と言う職分^あに在る者ならば誰もが、使徒パウロの如く自らを罪人の首^{つみびと}としての自覚を持つものでありますが、それでも尚^{なほ}、神の家族の一員となる神の定め^{しつよう}が執拗^{しつよう}に脳裏^{のうり}から離れません。

聖書の聖言^{みことば}の中には、確かに『汝らは神なり』との文言^{もんごん}が旧・新約聖書にそれぞれ1カ所づつ拝見する事が出来ます。

◎『我^{われ}い^いえらく 汝らは神なり 汝らはみな至^{いとたかきもの}上者の子なりと』

(詩篇第82篇6節)

此の聖言^{みことば}に対して、ヨハネ傳第10章34節35節ではこう記しております。

◎『イエス答へ給う“汝らの律法に【われ言う、汝らは神なり】と録されたるに非ずや。かく神の言を賜りし人々を神と言えり。聖書は廃るべきにあらず”』

詩篇の第82篇6節の聖言では、『汝らは神なり、汝らはみな至上者の子なり』とあり、神の子としての存在である事がはっきりしております。

此の地に在って、安倍家の子供は安倍姓であるように、神の家族は神である、と言えます。故に、神の子供も神であると記される由縁であります。

主イエス様が言われた如くに、私たちは、世の者ではありません。

◎『まづ神の国と神の義とを求めよ』(マタイ傳第7章33節)

神の国と神の義とを求めるには、どうするべきか、誰でもそう考えます。

聖書を神のお言葉として素直に導かれる者は、必ず次の聖言に出遭い、又その導きに随います。

◎『人は水と霊とによりて生まれずば、神の国に入る事能わず。』

(ヨハネ傳第3章5節)

私たちは、主の聖言に随って“水と霊”のバプテスマを受けました。

“水”の洗礼は、主が十字架でお流し下さった御血潮に依って全身を洗い潔められ、つまり、主と共に十字架に掛かって主と共に一度は生命を葬られた者となりました。

その事に付きましてはロマ書第6章4節に

◎『我らはバプテスマによりて彼と共に葬られ、その死に合わせられたり』

と記されております。

“霊”とは、イエスの御霊であります。

使徒行伝第2章の聖霊降臨の記事に、詳細が示されております。

我らは水のバプテスマに依って一度は死んだ者であり、聖霊に内住して戴き、新しく神の国に生まれた者であります。

神の国に新しく生まれた我らは、神を知らない者や神に逆らう者達とは運命を異にして、おそろしい第二の死(ゲヘナ)に逝く事なく、生まれ故郷であります神の国へと携え挙げられる身分であります。

◎『我らの国籍は天に在り、我らは主イエス・キリストの

救い主として其の処より来たりたまうを待つ。』

(ピリピ書第3章20節)

◎『汝らの名の天に録されたるを喜べ。』

(ルカ傳第10章20節)

嗚呼、何たるお恩恵・何たる祝福・何たる榮譽である事か！

そればかりでは無く、テトス書第2章14節には

◎『キリストは我等のために己を与えたまへり。

是われらを諸般の不法より贖い出して、

善き業に熱心なる特選の民を己がために潔めんとてなり。』

此処で注目すべきは、“特選の民”との言葉であります。

旧約聖書では、ユダヤ民族が“選民”と言われ、神から他民族(異邦人)と区別して特別な庇護の下に存在しておりました。

しかし、彼らは待ち望んでいた救世主(メシヤ)が主イエス・キリストとして此の地上に顕現して下さったにも拘わらず、あろう事か、神から遣わされたその御方を、神を冒瀆した罪人として十字架に掛けたのであります。

その事に依り新しき御救いは、使徒パウロが神から異邦人伝道者として遣わされ、初代教会時代は兎も角、現代では其の御救いに与るのは、異邦人が殆どであろうかと思われま

す。『諸般の不法より贖い出して』とありますが、先祖の又々先祖の昔から真の神様とは識る術もなく、無頓着の中での偶像信心などの罪から、現代の自分自身の不信仰に至る罪まで一切切の罪を主イエス様は、あの十字架に於いて贖って下さったのであります。

また『善き業に熱心なる特選の民を己が為に潔めんとてなり』と在ります通りに、主イエス様は御自分の為に、私達を潔めて善き業に熱心な者とする目的を持って、あの十字架にお掛かりになり、そのお生命を代償にして贖って下さったのであります。

◎『またその子イエスの血、すべての罪より我らを潔む。』

(ヨハネ第一の書第1章7節下半句)

十字架に於いて主は御血を流され、その御血を以て、私たちの罪は洗い流され潔められたのであります。

私達は申すまでも無く、主イエス様に大きな負債があります。

有史以来、一度も神を崇めた事の無い異邦人であった私たちを、斯くも破格の身分へと引き上げて下さる御方に、私たちは何を以てお報いしたら宜しいのでありま

しょうか？
何もしないで、天に携え挙げられ、永遠に神の家族の一員としての待遇を戴けるとは、決して思えるものではありません。

旧約時代の613件もの律法は、主イエス様の十字架のご栄光を以て、律法の終となって下さった(ロマ10:4)のでありますが、律法に録された内容は、神の品性を顕したものであり、その本質は【愛】であります。

ですから、ロマ書第3章31節に此のように録されております。

◎『然らば我ら信仰をもて律法を空しくするか、
決して然らず、反って律法を堅うするなり。』

主は我らに、新しき誠命として最後の晩餐の折に仰有いました。

◎『われ新しき誠命を汝らに与う、なんじら相愛すべし。
わが汝らを愛せしごとく、なんじらも相愛すべし。』

(ヨハネ傳第13章34節)

主が仰有る【愛】とは、十字架で我らに示された愛が基準であります。

そこで主が我らに仰有りたい事は、日常親しく交わっている私達の周囲の者が真の神を知らない儘にゲヘナ(地獄)に墮とされ、地上では体験した事も無い発狂そうな不快と恐怖の中で、死ぬ自由すら与えられない永遠の苦しみに逝くとしたら、あなたはどうかさいますか？

新しき誠命^{いましめ}で主が言われる【人を愛する】とは、こう言う事であります。

◎『ただ一人の亡ぶるをも望み給わず』(ペテロ後3:9)と言われる御方^{おかた}は、更に厳しい^{きび}聖言^{みことば}をヨハネ第一書第3章14節～16節に記しておられます。

◎『我ら兄弟(姉妹)を愛するによりて、

死より生命に移りしを知る、愛せぬ者は死のうちに居る。

おうよそ兄弟(姉妹)を憎む者は即ち人を殺す者なり、

凡そ人を殺す者の、その内に永遠の生命なきを汝らは知る。

主は我らの為に生命を捨てたまえり、

之によりて愛と言うことを知りたり、

我等もまた兄弟(姉妹)のために生命を捨つべきなり。』

上記の聖言^{みことば}を、しっかりと拝読^{はいどく}させて頂きましょう。

新約聖書に“死”と記されておりますのは、第二の死、即ちゲヘナを意味しており、上記で“人を殺す者”とは“人をゲヘナに突き落とす者”と言う事になり、直訳^{ちよくやく}しますと、貴方^{あなた}が福音を語らぬ儘に、その人が死んだとしますと貴方は、その人をゲヘナに突き落とした事になります。

◎『御霊^{みたま}みずから我らの霊とともに我らが神の子たることを証^{あかし}す。

もし子たらば世嗣^{よつぎ}ぎたらん、神の嗣子^{よつぎ}にして

キリストと共に世嗣^{よつぎ}ぎたるなり。』 (ロマ書第8章16, 17節)

私たちは神の御恩^{ごおんちよう} 寵^みの中で御救い^{あずか}に与った者であり、決して神様への御恩^{ごおん}を忘れてはなりません。

ルカ傳第13章6節から9節迄の聖言^{みことば}が、示されております。

◎『又この譬^{たとえ}を語り給う

“あるひとぶどう園の樹^うに植えありし無花果の樹^{いちじく}に來りて、

果を求むれども得ずして、園丁^{そのつくり}に言う

「視よ、われ三年きたりて此の無花果の樹^{いちじく}に果を求むれども得ず。

これを伐り倒せ、何ぞ徒らに地を塞ぐか」

答えて言う「主よ、今年も容^{ゆる}したまえ、

我その周囲^{まわり}を掘りて肥料^{こやし}せん。そののち果を結ばば善し、

もし結ばずば伐り倒したまえ”』

働くべき者が全く働かなければ、その者を愛し心に懸^かけて種々^{いろいろ}ご配慮^{はいりよ}下さっておられる御方^{おかた}としては、堪らないお気持ちであろうかと思われま。

私達は、神様から福音を委^{ゆだ}ねられている使者であり、唯一^{まこと}の神様の証^{あかし}人^{ひと}でありますから、救われてから禱^{いの}りに応^{こた}えられた数々^{かずかず}を恥^{はじ}る事なく雄々^おしく語らって行かれる事を主イエス様は望んでお出^いでであります。

使徒パウロは、ロマ書第1章16節と17節でこう言っておられます。

◎『我は福音を恥とせず、この福音はユダヤ人を始めギリシャ人にも、
凡て信ずる者に救いを得さす神の力たればなり。
神の義はその福音のうちに顕れ、信仰より出でて信仰に進ましむ。
録して“義人は信仰によりて生くべし”とある如し。』

またロマ書第10章17節には

◎『信仰は聞くにより、聞くはキリストの言による』とあり、遡って14節には◎『未だ聴かぬ者を争で信ずることをせん、宣伝うる者なくば争で聴くことをせん』正にその通りであり、真の神を信じようにも、福音を知らせてくれる者がいなければ、本物の真理の声を聴く事も出来ませんし、主イエス様を信ずる事も出来ないのです。

◎『弟子たち出でて、あまねく福音を宣傳え、主も亦ともに働き、
伴うところの徴をもて、御言を確うし給えり。』

マルコ傳第16章20節の聖言であります、主イエス様は福音を語る者と一緒に働いて、そこに徴(奇蹟)を顕して下さいます。 ハレルヤ！

(2018・12・1 伊豆イエス之御霊教会 牧師 三崎 紘 文責)